

Title	古典経済学と初期社会主義(Abstract_要旨)
Author(s)	鎌田, 武治
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	1969-09-24
URL	http://hdl.handle.net/2433/213207
Right	
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

【 22 】

氏 名	鎌 田 武 治 かま た たけ じ
学 位 の 種 類	経 済 学 博 士
学 位 記 番 号	論 経 博 第 25 号
学位授与の日付	昭 和 44 年 9 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	古典経済学と初期社会主義

論文調査委員 (主 査) 教授 出口 勇 蔵 教授 田中 真 晴 教授 平井 俊 彦

論 文 内 容 の 要 旨

この論文集はイギリス古典経済学とイギリスの初期社会主義思想との関係を、主として経済学史の立場から、検討することを意図している。イギリスの古典経済学については疑問はないが、初期社会主義思想といっても、必ずしも明らかでない。著者がここで解するのは、リカアドウ派社会主義である。

著者は序論において、上記二つの思考の関係を尋ねる問題点を、人口論と価値論とにしているが、この問題点は経済学史という著者の視点をしめしている。

本論「初期社会主義思想の諸類型」は3篇に分かれる。第1篇は「資本制社会の自由主義的批判」と題され、ここで紹介されるのは、ピアシー・レイヴンストウンとトマス・ホジスキンの思想である。第2篇は「協同組合主義の形成」と題されており、ここで検討される思想家は、チャールズ・ホール、ウィリアム・タムソンである。「協同組合主義の展開」と題された第3篇では、ジョン・グレイ、トマス・ロウ・エドモンズ、ジョン・フランシス・ブレイである。そのほか、付論として、リカアドウ派社会主義者にたいする反対説を4人の著者について紹介したものがそえられている。これが本論文の構成である。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

これまで、わが国において、リカアドウ派社会主義の研究は多いとはいえない。それもただ実証的に記述して紹介の労をとるか（たとえば堀経夫博士）、マルクス主義の立場から空想社会主義の一般的規定を予め前提しておいて、個々の思想家について検証するかであって、チャアティスト運動の中で、その政治的・経済的・思想的内容を十分に連関づけて、この思想を研究したものはまだ現れていないといってよい。またかず多くのこの派の思想家の一人一人について刻明に研究されたこともまた稀であるといえる。

著者のこの研究は従来よりも更に実証主義的である。ホジキンやタムソン（この人の名はトムソンと読む方が正しいとのことである）のような有名な思想家の主な著述について、経済学ならびに社会思想上の見解を調べ上げることはいうまでもなく、レイヴンストウン、チャールズ・ホール、ジョン・グレイ

イ、トマス・ロウ・エドモンズ、ジョン・フランシス・ブレイのほか、匿名の著者をふくむ数人の著者について、かれらのかず多くの著述や小冊子を、わが国の諸大学の蔵書に求めて、比較検討して成ったこの成果は、わが国で相当貴重なものであって、その労苦は高く評価すべきだと思う。近年わが国では、安川悦子（旧姓安藤）氏や遊部久蔵教授や白井厚氏の研究が発表されているが、この研究もそれらとともに数えてよい新研究である。

いま、ホジスキンのタムスンにかぎって、著者の結論を要約すると、次のようになる。

ホジスキンの資本主義批判の思想は、マルサスの人口論とリカアドウの収穫逦減法則とを否定しようとする意図から、つくられた。つまり、人口の増加は勤勉と創意の増進につながり、後者は収穫の逦増をもたらすという連関が重要だというのであった。けれどもこういう連関が成り立つのは現在の社会においてではなく、あたらしい社会においてである。そしてそのあたらしい社会の主体となるのは「中間階級」であり、「中間階級」というのは「自分の人格のなかに労働者と資本家との二つの性格を統一している」人からなる階級であるというのである。かれの「労働擁護論」Labour Defended, 1825はこういう小生産者の労働を擁護し、この人たちが労働の収益を全部所有する、いわゆる「全労働収益権」を自然権としてみとめることによって、資本制社会の批判を主張したものである。しかしながら、この立場は、チャアティスト運動の展開のうちに、労働者階級とたもとを分かつに至ったのである。

タムスンについていうと、このアイルランドの地主は、「分配の自然法則」というものの存在を主張し、富の分配を正しくすることが社会科学の課題だと考え、道徳的な立場をつよめるのであるが、主著「分配論」(An Inquiry into the Principles of the Distribution of Wealth most conducive to Human Happiness, 1824)にはこの思想の骨子がみられる。

タムスはあたらしい社会を構想して、協同組合的村落を考えるが、著者はこの思想家を、没落しつつある小生産、とりわけ小農民を基盤とした協同組合主義者と、規定している。

以上が本論文における主張の核心である。ここに、リカアドウ派社会主義にたいする創意にみちた、自由な研究があり、とり上げる思想家の生き生きした統一的な映像が獲得されているかということ、必ずしもそうではない。むしろ、既成の空想社会主義観でもって処理されているといわねばならず、この点で遺憾は残るのである。けれども多くの史料を渉獵してそれらに直接にあたって成ったこの研究についやされた努力は、相当に高く評価し、我が国にはじめて紹介された思想家の思想内容でもって、わが学界の財産を豊かにした功績を認めることができる。

この意味で、本論文は経済学博士の学位を授与するにふさわしいものと認められる。